

- 竹村和子, 2000, 「『資本主義社会はもはや異性愛主義を必要としていない』のか—「同一性の原理」をめぐってバトラーとフレイザーが言わなかったこと」, 上野千鶴子編, 『構築主義とは何か』勁草書房, 213 - 253.
- , 2002, 『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店.
- , 2004, 「修辭的介入と暴力への対峙—社会的なものはいかに政治的なものになるか」『社会学評論』219号 (Vol.55, No.3) : 172 - 188.
- 立岩真也, 1997, 『私的所有論』勁草書房.
- , 2000, 『弱くある自由へ—自己決定・介護・生死の技術』青土社.
- , 2004a, 『自由の平等—簡単に別な姿の世界』岩波書店.
- , 2004b, 『ALS—不動の身体と息する機械』医学書院.
- , 2004c, 「社会的一言の誤用について」『社会学評論』219号 (Vol.55, No.3) : 331 - 347.
- 富永茂樹, 2005, 『理性の使用—ひとはいかにして市民となるのか』みすず書房.
- Wall, T.C., 1999, *Radical Passivity: Levinas, Blanchot and Agamben*, State University of New York Press.
- 山之内靖, 2004, 『受苦者のまなざし』青土社.

《論文》

子育て支援サービスを提供するという経験について

—ケア提供者の語りにおける「子ども」カテゴリーの二重性—

松木 洋人*

1. 問題設定

近年の日本の福祉政策においては、少子化の進行を一つの契機に、子育てを家族のみが担う私的な事柄とするのではなく、公的領域がより積極的に子育て支援に関与するという方向への政策理念の転換が見られる(藤崎, 2000)。こうした「育児の社会化」をめぐる議論の活性化と併行して、児童福祉の領域においても、1997年に児童福祉法が改正されるなど、救済的児童保護対策から普遍的児童福祉へと児童福祉観の転換を図り、子育て家庭支援の充実を目指す動きが顕著である(柏女, 1999)。そして、このような動向が実際の施策に結びつくことでもたらされるのは、子どもが家族成員以外の人間によってケアを提供されるという機会や時間の増大であろう¹⁾。

しかし、少子化がもたらす事態の深刻さと、その対策として育児の社会化が必要であることが盛んに語られる一方で²⁾、育児が社会化されたその宛先において、子どもへのケアを提供する者がいかなる出来事を経験し、それらをどのように意味づけているのかはあまり論じられることがない。

近代社会における家族の特徴の一つは、地域社会や親族などの外部から明確に境界線を引いたうえで、子どもの養育を独占的に担うことにあるとされる(渡辺, 1994)。近代化の進行に伴って、家族はそれが担っていた機能の多くを外部化して、「子どもの社会化」と「成人のパーソナリティの安定化」という二つの機能を専門的に担うようになったとT. パーソンズが論じるように(Parsons and Bales, [1955] 1956 = 2001 : 25)、近代社会において、子どもの世話をすることは家族が家族であるための重要な構成要素である。それゆえに、子育て支援サービスの提供は、私的領域と公的領域の再編成という論理的含意を持つ。

本稿の目的は、私的領域で提供されることが前提とされてきた子どもへのケアを、公的領域において自らの職業として提供することに従事する人々が、どのような規範的な論理を通じて、その職業上の経験を理解可能なものとしているのかを考察することにある(cf. 松木, 2003; 木戸, 2005)。育児の社会化がもたらす状況が、その担い手によってどのように経験されているかは、現代家族の近代性と脱近代化、その福祉領域との交